藤原道長の生き方とその時代

鎌倉考古学研究所理事　伊藤一美

はじめに

・世界記憶遺産（世界の記憶）『御堂関白記』の世界を知る。
・藤原道長の一生とその人間関係を垣間見る。

1　道長の政界への登場

（政界への登場）

○長徳元（995）5月11日の記事から：
・藤原道長、30歳。この4月に左大将、5月11日「内覧宣旨」を下される。天皇は一条天皇。この時期が道長の人生の転機にあたる。
・4月10日、関白道隆の死去。道隆の子伊周（これちか）は父の病気時期代行としての役割（内覧）を行っていたが、次関白に道兼が就任。彼も5月8日に流行病で死去。この人事変遷に機を狙っていた伊周は道長を酷く恨む。
・道長、6月19日右大臣（太政官のトップ）、藤氏長者、内覧宣旨をうける。7月に左大臣就任、以後長和4（1015）に准摂政に至るまで約20年間を内覧・左大臣として君臨。
・7月24日、「陣の座」で伊周と道長の口論事件発生。8月2日には道長随身が伊周の弟隆家従者に殺害（小右記）。
・さらに伊周の祖父高階成忠（道隆の甥）による道長呪詛事件も発生（百練抄）。
・その後、長徳2年、中関白家である隆家従者が花山法皇の輿に屋を射かけたことで、伊周は太宰権帥、隆家は出雲権守として左遷された（長徳の変996）。翌年大赦で戻され、その後は道長との交流も再開する。
・伊周の子道雅は中宮影子の御給（ごきゅう）で叙爵（寛弘元1004・正・6条）。また道隆の孫忠経もまた道長の支援を受けていた様子である。

（道長の仕事とは何か）

・「儀礼」「儀式」という語彙に象徴されるが決して形骸化したものではない。政治的な意思決定、行政手続き、任官、社会秩序の維持確認などが「儀式・年中行事」として実行されていたことに注意。
・「除目・任官」の事例：「顕官」といって「外記」「式部」「民部丞」などの場合。
　①本人が希望する任官の自薦状を取りまとめて天皇の所に提出する。
　②執筆（しゅひつ）大臣が確認し、除目の場の公卿らに下される。
　③欠員1名分の官に3名程度の候補者を決める。
　④執筆大臣から天皇へ候補者名文書が奏上される。
　⑤天皇から任官者が決定され、大臣に連絡する。

○以上の淵源は「養老選叙令3任官条」の規定にある。太政官公卿の選定による選考を天皇が決定する。こうした（煩雑な）手続きを経て確定されることが現実社会での認知を得られる基本となるものである。
・「節会」の事例から。

「元日節会」「白馬節会」（あおうま・正月期）、相撲節会（すまい・7月）、豊明節会（とよのあかり・11月）では、天皇と臣下の共同飲食の場として機能する。食べ物自体が天皇から下賜されたもの。位階と官職により内容や挨拶手順など皆異なる。5位、侍従以上を対象にした「節録」は天皇との特別な関係を視覚的に表現し、かつ衆人環視のもとでの特別な関係を認知するものである。「勧杯」「巡杯」「料理」「配膳」などその身分に応じた接待

がなされる決まり。
・「紫宸殿」での「宴会」はこうした天皇と臣下の位置を絶えず確認するもの。「貴族」と「官人」との身分差異を「煩雑な形式」によって天皇を頂点とする序列の可視化であり、宮廷の秩序社会を表現したものといえるもの。
（日記をつけることの意味）
・自身、または先輩公卿、先祖が書き置いていった日記・別記・部類記に書かれた「政務・儀礼・儀式」の記録こそ、貴族社会での「マニュアル」であり、先人が行ったという重みが意味と価値を持つ。
・「西宮記」（西宮左大臣源高明編：朝議・装束・輿などの規定）、「北山抄」（藤原公任編：年中行事・儀式・近衛大将・国司の規定；女婿教通のために記す）、「江家次第」（大江匡房が関白師通の依頼に入り儀礼を編集）なども日記に準じた貴重書で朝廷公卿の必需品。
・因みに道長の日記『御堂関白記』の書き出しは、「内覧」に任官した長徳元（995）から出家を遂げる寛仁 3（1019）で終わっていること。これこそ「政治家としての日記」といえる所以である（山中裕 1988）。
・但し、実際の道長は日記への記載にばらつきがある。寛弘年間（2004～12）あたりからやや詳しくなり、長和・寛仁年間（1012～21）辺りが一番充実した記録となっている。道長が職務に熟達してきた時期である。
・一条、三条天皇時代は、道長は内覧・左大臣（一上・いちのかみ・筆頭公卿。太政大臣、摂政関白は除く）として、最高執務機関である太政官政務を統括する立場。だからこそ政務と儀礼に詳しく、その記録も充実している。
（道長作法は「御堂流」の呼称へ）
・道長自身は祖父の九条師輔の時代の「九条流」（「九条年中行事」）儀式儀礼を継承。また藤原実頼（「水心記」「小野宮殿記」）・実資（「小右記」「小野宮年中行事」）の「小野宮流」なども大いに参考とした。後に道長の自著「蓮府秘抄」をあらわす（日記寛弘 2・9・11 条）。
・こうした意味で、道長自身は自己の儀式体験を基礎にしつつ、多様な儀式儀礼を積極的に取り込んで再体験していくタイプの貴族である。それは他流を意識しつつ自己の流派を確立させていく過程とも言いえる。さきの長和年間には装束の色や着合わせなどが他の公卿と異なる傾向を示していることに注意。自他を区別しようとする傾向が見えてくる。
・太政官システムにも道長は「奏事」（天皇・院に直接に奏上する方式）の方向性を選択していく。つまり「太政官組織」の関与を少なくして「内覧」地位行為を積極的に取り込んでいく傾向が表れてくる。
・道長の政治システムは「道長の王権」（上島享 2010）としての指向性をもち、その形態は「院政」の始源に結び付くものと考えられている。
・但し「御堂流」という語彙が生まれてくるのは、道長の玄孫にあたる藤原忠実の頃からである。

2　道長の家族と人間関係

（道長の家族たち）
・道長の親族たち
→正妻源倫子（ともこ・雅信の女）、妾妻源明子（源高明の女）。日常の住まいは土御門第（義父雅信の屋敷）で倫子とともに住む。
◆→道長子たち

○（倫子腹）影子（あきこ）、頼通、教通（のりみち）、妍子（きよこ）、威子（たけこ）、嬉子（よしこ）・尊子（たかこ）。
○（明子腹）頼宗、顕明、能信、寛子（ひろこ）、長家。
◆→女子たちの婚姻先
・影子（一条天皇后、後一条・後朱雀天皇を生む）、妍子（三条天皇后、禎子（よしこ）内親王を生む）、嬉子は即位前に歿。3 人は一条・三条・後一条の中宮となり、道長家は「一家三后」を実現する。
・寛子（小一条院敦明親王）、尊子（源師房）。
（子どもの出世と母の身分）
・道長から頼通へ摂政交代時：頼通（内大臣 26 歳）、教通（中納言 22 歳）、能信（中納言 23 歳）
・公卿就任年齢：「公卿」（くぎょう）とは大臣、摂政・関白以下、大・中納言、参議を呼ぶ。3 位以上で 4 位の参議は含まれる。和語では「上達部」（かんだちめ）。唐名では「棘路（きょくろ）・卿相（けいそう）・月卿（げっけい）」。
・子どもたちの就任年齢：頼通（15 歳）、教通（15 歳）、頼宗（19 歳）、能信（20 歳）、長家（倫子養子で 18 歳）。摂関に就任した者は頼通と教通のみ。

3　一条天皇と中宮影子を垣間見る

（紫式部日記にみる影子の懐妊）
・「秋のけはいの立つままに、土御門（第）の有様、いはむかたなくをかし、池のわたりの梢ども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり、やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水の音なむ、夜もすがら聞きまがはさる」
・寛弘 5（1008）年 7 月 16 日、影子は一条院内裏から退出して土御門第に入る。そののち、彼女のお産の無事を祈祷する五壇御修法が始まる 7 月 20 日までの様相を、式部が描いた部分が上記の引用の箇所である。
・9 月 11 日、影子（あきこ）は一条天皇（円融の子）の第一皇子敦成（あつひら）を生む。一条天皇の中宮は、道長姉の詮子（あきこ）である。
（道長の記したこの時期のようす）
・5 月 8 日、土御門第にて法華三十講を 4 月以来から開始。東宮（居貞＜おきさだ）親王・後の三条天皇）らが訪問している。
・5 月 23 日、中宮の影子（あきこ）の修善を明救（みょうぐ）僧都が奉仕。
・6 月 13 日、一条院内裏で中宮のために勝算を呼んで御修善、番僧は 20 人。道長も不具合で外出を控えるが後に出席する。
・6 月 14 日、中宮が内裏に入る。御車に乗る。御在所は一条院東北対に上る。中宮の修善は明救僧都。三七日（21 日間の祈祷）の予定。
・7 月 9 日、中宮が内裏一条院から退出の予定。ところが（帰宅予定の道長第の）土御門第が大将軍の遊行している方角で方向が悪いと判断。陰陽師を召して尋ねたが、うやむやだった。御出の時刻を過ぎ結局内裏にて宿泊する（16 日迄、内裏に滞在）。
・7 月 24 日、白檀で薬師仏を造立開始、前僧都明救と阿闍梨心誉が中宮の御修善を行う。
・8 月 2 日、仏師の康尚が薬師仏を土御門第に遷す。彼に禄を下す。僧正の雅慶が中宮の御修善を担当。内裏に道長参内、候宿する。

・8月4日、丹生・貴船社に止雨祈祷の使者派遣した。6月1日より雨が止まず、農業の為には慶事だが、今月に入っても止まない。損害があると困るとこの祈祷を実施。
・8月11日、「定考」（こうじょう：逆様に読む事が慣例）の延期。「定孝」とは8月11日、前1年間の勤務成績報告の儀式)。祈年穀奉幣の前斎による。左大弁（藤原行成）は服喪中で、右大弁（藤原説孝ときたか）も病悩中である。
・8月12日、午の刻、内裏に参る。祈念穀奉幣使に持たせる宣命（せんみょう）草案を作成、清書を一条天皇に奏上する。八省院に着し、奉幣使を発遣させた。小雨が降った。申2刻（午後4時すぎ）の頃だった。
→「八省院」とは大内裏の正庁で朝堂院ともいう。朱雀門の正面にあたり、内部は大極殿（北)、朝堂院（中)、朝集院（南)。のち即位、儀礼、中でも御斎会・奉幣使発遣が中心の場所となる。

（中宮のお産）

・9月10日、子刻に中宮の御産所（土御門第寝殿）から「女方」（源倫子ともこ）が来て「中宮が産気づいた」と言う。道長は御産所に向かう。まさに産気の様子だった。そこで、春宮傅（藤原道綱)、中宮大夫（藤原斉信ただのぶ)、中宮権大夫（源俊賢としかた）に書状で「まいり来られよ」と出す。他の人々も多くきた。中宮は一日中病んで苦しんでいた。
・9月11日、中宮が平安（たいら）かに男子（敦成親王あつひら）をお産みになった。伺候僧、陰陽師らに下賜した録にも差異があった。同時刻に御乳付を行い、臍の緒を切った。御湯殿の具を作り始めた。酉刻（午後6時頃）に右少弁（藤）広業が読書を行った。「御注孝経」で朝夕同じものを読み聞かせた。内（一条天皇）から「御劔」（みはかし）を下賜された。左近中将（源）頼定が使者としてきたので禄を渡した。産穢に触れてしまった人だったからだ。御湯殿の鳴弓役は五位10人、六位10人だった。
・9月12日、御湯殿の読書役は、朝が（中原）致時（むねとき：明経道)、夕方は（大江）挙周（たかちか）が奉仕した。
・9月13日、三夜の産養（うぶやしない)。中宮大夫が中宮御膳の用意担当した。沈香の懸大盤六脚、笥（け）が置かれ、馬頭形の盤、及びその他の器物はすべて銀で造ってあった。
・9月25日、内裏に参上する。天皇から中宮が内裏に帰参する日時を尋ねられた。参上して「11月17日」と伝えたが、「参上することになっている日にちは遠いものだ。私が土御門第に行幸することにしよう」とおっしゃられた。
・9月28日、(陰陽師の賀茂）光栄（みつよし）と（安倍）吉平を召して行幸日時を尋ねた。来月13、16、17日が吉という。左中弁を遣わして天皇に奏上させた。13日の行幸に決定する。「召した陰陽師に命じて勘申させよ」と天皇は言われた。行幸雑事を取り決めた。土御門第で秋季の季御読経を開始した。

（土御門第への行幸と祝賀行事）

・10月4日、右仗座（一条院寝殿東北の廊）に着座。申文の上申、次いで官奏。右仗座に戻るが、大弁（説孝ときたか）の着座が遅かったので、史（惟宗）博愛（ひろちか）が早く出てきて文書を奉じた。大弁が右仗座に着したのを待って文書を受取る。吉書3枚の奏上だった。来る16日の行幸の召し仰せ役は中宮権大夫（源俊賢）が上卿（しょうけい・担当のトップ）を務めた。天皇は（大江）匡衡（まさひら）朝臣を召し、若宮の御諱（敦成あつひら）を勘申させた。
・10月16日、早朝に土御門第の御室礼が終わった。内裏に向かう。巳2刻（午前10時半頃）に天皇は東門から御出。午1刻に土御門第に到着。西中門から入られた。御輿乗車の

まま寝殿に到着。公卿らは西対の南廂座に着す。殿上人は同じく東西の廊に座す。この間には、船楽が南山の間から出てきて、御前を数回廻った。公卿の座が決まるとそれは帰っていった。道長が天皇前に出向いた。天皇は「若宮」を見奉られた。道長が若宮を抱き奉った。「上」（一条天皇）もまた抱き奉られた。その後、道長は公卿の座に着した。数献の盃酌があった。この間、天皇は束帯御装束の表衣（うえのきぬ）を御脱ぎになった。「朝干飯」（あさがれい・天皇の御食事）のように御食前を供し奉った。陪膳は三位（橘）徳子である。土御門第に宿していた内裏女房たちが御食膳を取り次いでいた。

その後、天皇は（源）道近朝臣を召し、若宮を「親王」とするという宣旨を道長に仰せらた。そこで、道長は道方に宣旨の作成を命じる。「敦平親王家勅別当」は右衛門督（藤原斎信ただのぶ）となる。

ついで藤原氏の公卿・大夫らが慶賀を奏上する。南庭で北を「上座」として東面して拝舞（叙位任官、禄の賜与への感謝の動作）した。のち各自着座する。右衛門督はさらに中門内で慶賀を奏上する。次いで天皇の御簾をあげさせ、御倚子（いし）を（新造して）立てた。寝殿中央間に簀子敷に円座（わろうざ）を敷く。天皇はまず道長を一人召して中宮職の官人を賞しなさることを仰せられた。それを承って着座した。

次いで諸卿を召された。この間、船楽が池北の松樹下に止めて楽奏した。唐楽、高麗楽だった。ついで「龍頭鷁首」「舞台船」（特に召した人々が乗る）、「室形」（楽人の船）が続く。この間、公卿には「衝重」（ついかさね）が下賜された。

天皇御膳は「腋（二の次の意味）御膳」で軽食だった。これは中宮影子が用意した。陪膳は東宮傅（藤原道綱）が務める。公卿が御盤を役送した。陪膳（道綱）天皇に御酒を供した。

船楽退出後、楽人を寝殿階下に召して数曲を演奏させた。内大臣（藤原公季）が天皇に「御夾頭花」（かざしのはな）を供した。諸卿も同様に（自分の）冠にさした。「長慶子」が演奏されていたとき、道長はそれにあわせて舞った。

公卿に録が下賜された。中宮から天皇への贈り物は笙・横笛・高麗笛だった。中宮大夫（藤原斎信）、中宮権大夫、中宮亮（すけ：藤原実成）が天皇に供し、送り主を奏上して退座した。

天皇が入御された。公卿は西の対に着座した。道方朝臣が右大臣（藤原顕光）を天皇御前に召した。右大臣は「叙位簿」を天皇の御前で書いた。天皇が道方を介して道長に言われたことは「汝（なれ）に一階を賜うというのはいかがか」と。奏聞して伝えるに「私は官位が共に高くあります。公にお仕えしてもその恐れがないわけではありません。位階は戴かなくてもありがたいことです」と。天皇のお言葉「それなら汝の家司一人に賞を与えよう。その人を奏上せよ」と。そこで（藤原）季随（すえより）名を奏上した。

叙位が終了し着座した。藤原斎信は正２位、源俊賢、藤原頼通は従２位、教通は従４位上、季随には従４位下となった。また道長は道方を介して、「実成朝臣は公卿の中宮亮（すけ）です。彼に一階を賜って戴くのはいかがか」と奏上する。天皇は「実成は右大臣が書き落したのだろう。早く入れてあげなさい」と。右大臣は早速に「従三位実成」と書き込んだ。源倫子（ともこ）にも従１位を賜った。慶賀の人々はじめ、道長や内大臣らもその慶を奏上した。これは子の慶賀というものである。その後、天皇の還御はいつものようである。

４　道長の学問と芸能

（寄贈本で増える道長の蔵書）

・寛弘元（1004）10月3日、源乗方が寄贈した「文選集注」（もんぜんしっちゅう）が11月3日には中宮彰子に贈られてさらには一条天皇に献上されている。
・寛弘元年9月7・15日、藤原行成持参の「新楽府」（しんがふ・白氏文集の抄本）上下巻が息子頼通の勉強テキストとなる。なお以前の6月4日に彼に同書籍の写を作ることを行成に依頼していた。
・寛弘2年9月17日、藤原行成が「往生要集」を筆写して道長に献上。
・寛弘3年3月28日、4月4・5・7日には数千巻の書物が道長に寄贈される。
・寛弘5年8月15日、藤原行成、「後撰和歌集」を筆写して献上。
・寛弘7年8月29日条には棚の厨子に史書や詩文集を2千巻以上を収めたと記す。
・長和2（1013）9月14日、入宋僧から「白氏文集」が献上される。

（挙行される詩文・作文・歌合わせ会など）

・長保元（999）年5月6日、土御門邸宅で「作文会」がもたれる。以降70回以上も記録には見えている。「詩」を作り、互いに読む会。一条天皇下では、漢文学が重要視され、貴族たちはこれを学び、互いに競った。『本朝麗藻』などの漢詩文集が作られた（高階積善もりよし撰）。
・長保元年5月15日、法華三十講の開催に、当時の歌人たちを集めて「歌合わせ」を主催する。
・長保元年10月、道長は入内する彰子のために「屏風歌」の作成を多くの公家に呼びかけている。ある意味では道長は文壇作家の保護育成の役目をはたしている。
・長和4年10月25日、彰子の主催にいる道長の「五十賀」開催。道長の詠んだ和歌「老いぬとも、知るひとなくは、いたづらに、谷の岑とぞ、年を積ままし」（年老いて見いだしてくれる人がいなければ、ただある谷の松のように年を経るだけとなるだろう）と彰子に感謝の意持ちを詠んでいる。この和歌の原典は『文選』『白氏文集』のなかにある「澗底松」のイメージがある事なども指摘されている（北山円正2001）

（芸能と道長）

・寛弘7（1010）年正月15日、敦良親王「五十」（いか）の儀式では、『和漢朗詠集』の「酒」の歌「新豊酒色：新豊の酒の色は盃の中に清冷たり、長楽にの歌の声は鳳凰の管の裏に幽咽す」が藤原斉信によって詠じられ、その場の皆がともに朗詠した。
・「競馬」「相撲節会」などで、唐楽や高麗楽である「蘇芳菲」「駒形」「抜頭」「納曽利」が挙行される記事が多い。なお「納曽利」は勝負歌といわれており、競馬や相撲節会で舞われることが多いものである。
・道長の東三条邸宅では、寛弘4年11月26日に初めて「神楽」が挙行され、以後6か所ほど日記に見えている。まだ開催の時期が11月に固定化されていたわけではない。

（名器「鈴鹿」の所持と献上）

・和琴の名器「鈴鹿」の相伝所持。もとは道長祖父師輔の兄実頼が所持していたもので、源経房により寛弘7年正月11日に道長に献上されている。その4日後の15日、先述の「五十」儀式に際して道長から一条天皇へ寄進献上した。のちに『江談抄』に琵琶の「玄上」とともに御物として伝えられていく（豊永聡美2004）。なお「枕草子」には知られていないもの。

（源氏物語制作への支援）

・『紫式部日記』には、中宮彰子のもとで、草紙の清書作業に紙や硯などの材料を式部に提

供されていたことが記載されている。恐らくは『源氏物語』の清書作業ではないかと言われている。寛弘5（1008）年11月の事である。

（関白でないのになぜ日記「御堂関白記」とよばれるのか？）

・道長の日記呼称は「入道殿御歴」「入道殿御日記」「御堂御日記」「御堂御暦」「法成寺入道左大臣記」で最終には『御堂御記』となる。だが彼は「関白」にはなっていない。

・江戸時代に写本がいくつも作られ、『御堂関白記』という呼び方で広まったために現在もこの呼び方となっている。

・本文は「具注歴」という暦に書かれている。もとは朝廷から下賜されるもの。10世紀以降になされなくなり、注文主は紙を暦博士や陰陽師（おんようし）、宿曜師（すくようじ）に干支や吉凶を記入してもらう。間空き2行、1年分2巻（春夏＝上・秋冬＝下）の体裁。

・現在、道長直筆のものが14巻あり、近衛家「陽明文庫」に伝存。

・平安時代後期、孫の藤原師実が1年分1巻からなる書写本16巻を作る。そのほか彼の作成した「御堂御記抄」7種ある。

・鎌倉時代初期、近衛家が九条家を分立する際に元36巻あった道長自筆本を半分18巻譲渡する。さらに近衛家から分立の鷹司家に4巻を譲渡した。

・九条家から分立する二条家と一条家にも18巻のうちいくつかを譲渡したらしいが、現在は3家ともに全く直筆本はない。

むすびに

（道長の官職そのほか一覧）

康保3（966）　藤原兼家5男として誕生、母藤原中正女の時姫
天元3（980）　15歳、従5位下
永観2（984）　19歳、右兵衛佐
寛和2（986）　21歳、蔵人・少納言・兼左少将、従4位下。一条天皇即位
永延1（987）　22歳、従3位、源倫子と結婚
永延2（988）　23歳、権中納言、源明子と結婚。倫子が彰子を生む
正暦1（990）　25歳、正3位、兼中宮大夫、父兼家が関白となるが死去
正暦3（992）　27歳、従2位、倫子が頼通を生む
正暦4（993）　28歳、明子が頼宗を生む、道隆が関白となる
正暦5（994）　29歳、倫子が妍子（きよこ）を生む、明子が顕信を生む
長徳1（995）　30歳、氏長者、右大臣、明子が能信を生む、道隆と道兼が急死
長徳2（996）　31歳、左大臣、正2位、倫子が教通を生む
長保1（999）　34歳、彰子入内女御、倫子が威子を生む
長保2（1000）　35歳、彰子が中宮、倫子は従2位
寛弘2（1005）　40歳、明子が長家を生む、40歳の算賀
寛弘4（1007）　42歳、倫子が嬉子（よしこ）を生む
　　3月土御門邸の曲水宴、8月金峯山詣で金堂の経筒を埋納する、
　　12月浄妙寺多宝塔の建立
寛弘8（1011）　46歳、内覧となる、
長和4（1015）　50歳、算賀、摂政に准じて除目や官奏を行う

寛仁１（1017）　52歳、摂政を辞任し、頼通が摂政となる
寛仁２（1018）　53歳、威子入内
寛仁３（1019）　54歳、出家する、頼通が関白となる
万寿１（1024）　59歳、有馬温泉へ湯治に行く
万寿４（1027）　62歳、法成寺阿弥陀堂にて死去、62歳。12月４日、鳥辺野で葬送、木幡に埋葬される

（参考文献）

・竹内理三『律令制と貴族政権第Ⅱ部』お茶の水書房 1958
・山中裕『平安時代の占記録と貴族文化』思文閣出版 1988
・上島享『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会 2010
・北山円正「藤原道長の「谷の松」と新楽府「澗底松」」片桐洋一編『王朝文学の本質と変容　韻文編』和泉書院 2001
・大津透、池田尚隆編『藤原道長事典』思文閣出版 2017
・豊永聡美「累代御物の楽器と道長」日本歴史 672号 2004
・倉本一宏『現代語訳・御堂関白記・上中下』講談社学術文庫 2009

（了）